川南町文化財調査報告1

東平下周溝墓群

—2号方形周溝墓—

1982・3

宮崎県川南町教育委員会

序

川南町は宮崎県の中部に位置し，北の方には日向の歌人若山牧水先生の詠まれた麗峰尾鈴山を仰ぎ，名貫川で都農町，南は小丸川にそって高鍋町，西は上面木山によって木城町と境している気候温暖な土地であり，町内全域から古代人の使用したと思われる土器類が数多く発掘されているのは，昔から住みに適した土地であったと推察されます。

国光原台地には，千数百年前から人が住み文化の栄えた所とも思われる西ノ別府古墳群があります。昭和14年１月には川南古墳として県指定を受け，昭和36年２月には川南古墳群として国の指定を受けていますが，町民こぞって貴重な遺産として保存に力を入れているところであります。

われわれの祖先が如何にして住み，どのような生活をしてきたかは想像するに難しいが住居跡や，祖先の霊が眠る古墳の一つ一つを調査し解明してゆくことも必要だと思います。

１９８０年３月には日向古墳の原形かと言われている円形周溝墓が，１９８１年３月には方形周溝墓が発見され，以上のことは過去の歴史を知る貴重な文化遺産であり，町教育委員会では，県文化財保護審議会委員の先生を初め，町文化財保護審議会委員の方々を中心に関係者の御協力をいただきながら発掘調査をいたしたのであります。

それを復元し，貴重な遺産として後世に伝えようと願っているところであります。

この埋蔵文化財は歴史と文化の流れを知る貴重な文化遺産であり町民あげて，その価値を認識しその保存につとめなければならないと思いますが，この貴重な記録が郷土の文化財に対し，理解と協力をいただき，愛護する気持を養うために資することができますれば誠に幸いであります。

なお発刊にあたり，御執筆，御指導いただきました方々に厚く御礼を申し上げます。

１９８２年３月

川南町教育委員会

教育長　小嶋　　進

例　　言

1. これは，川南町教育委員会が学術的資料として活用するため発掘調査した報告書である。
2. 発掘調査期間は，１９８１年３月２日～１９８１年３月17日である。
3. 報告書の執筆には日高正晴と山中悦雄があたり，文末に執筆者名を記した。
4. 遺構実測は，北郷泰道，稲井裕子，山中が担当し，遺物整理・実測には，稲井，山中があたった。遺構写真は繁富勉が撮影し，遺構・遺物実測図のトレース，遺物写真，編集は山中が担当した。
5. 本報告書の断面図高度は仮０からの値である。方位は磁北である。
6. 調査の構成

調査主体　川南町教育委員会

（社会教育課）　課長　稲井正耕
係長　河野健二
主事　繁富勉

調査員　日高正晴（県文化財保護審議会委員）
北郷泰道（県文化課主事）

調査補助員　山中悦雄（岡山大学学生，現県文化課主事）
稲井裕子（奈良大学学生）
新藤繁秋（町文化財保護審議会委員）
福長一（〃）
遠藤学（〃）
永友芳弘（〃）
村井格二（〃）
竹村義政（社会教育課職員）
蓑原敏朗（〃）
吉村典道（〃）
金丸勇（〃）
稲垣守（〃）

目　　次

序

例　言

目　次

第１章　調査の経過 …… 1

第２章　地理・歴史的環境 …… 2

第３章　遺　　構 …… 4

第４章　遺　　物 …… 12

第５章　ま と め …… 15

付　　説 …… 28

挿　図　目　次

第１図　東平下遺跡周辺図 …… 2
第２図　方形周溝墓平面図・断面図 …… 3
第３図　方形周溝墓内部主体平面図・断面図 …… 6
第４図　方形周溝墓周溝土層図位置及び土器出土位置図 …… 7
第５図　北西周溝土層図 …… 8
第６図　南東周溝土層図 …… 8
第７図　南周溝土層図１ …… 9
第８図　南周溝土層図２ …… 9
第９図　北周溝土層図 …… 9
第10図　東周溝土層図 …… 9
第11図　土壙平面図 …… 11
第12図　集石１ …… 11
第13図　集石２ …… 11
第14図　集石３ …… 11
第15図　土器１出土状態 …… 13
第16図　土器２出土状態 …… 13
第17図　周溝・土壙出土土器 …… 13

図　版　目　次

図版1　周溝墓全景 …… 18
図版2　周溝墓内部主体（左：木棺痕跡，右：墓壙） …… 19
図版3　内部主体土層（上：長軸西側，下：長軸東側） …… 20
図版4　内部主体土層（上：短軸北側，下：短軸南側） …… 21
図版5　周溝土層（上：北西周溝土層，下：南周溝土層1） …… 22
図版6　周溝土層（上：南周溝土層2，下：北周溝土層） …… 23
図版7　土壙（上），集石1（下） …… 24
図版8　集石2（上），集石3（下） …… 25
図版9　遺物出土状態（上：土器1，下：土器2） …… 26
図版10　出土遺物 …… 27
図版11　復元した東平下2号方形周溝墓 …… 28

第１章　調査の経過

１９８０年３月，酪農業，森木清美さんが，飼料畑をトラクターで耕していたところ，方形にみぞを掘った遺跡らしいものを発見した。ここは，国道10号線から西に約２㎞入った，唐瀬原台地と呼ばれるところ，同年２月には埋葬場所を中心に丸くみぞを掘った円形周溝墓も見つかり発掘調査したところである。このときからこの墓のあることがわかっていた。週辺にはまだ同種の墓が数基あることも遠藤学（町文化財保護審議委員）の調査により確認している。遺跡発見後，土地所有者と協議し耕作を中止してもらうとともに，県文化課に連絡をとり学術的資料として活用するため調査をすることになり，発掘後には，円形方形とも，どのような文化的背景の中で造られたか，わからない部分が多いことなどから，これを考古学的資料として復元し保存することになりました。発掘調査は，予算関係上１９８１年３月に実施することになり約１年の期間があったため崩壊されないよう十分に連絡をとった。

調査は１９８１年３月２日から17日まで14日間で川南町教育委員会が調査主体になり，調査員は日高正晴（県文化財保護審議会委員)と北郷泰道（県文化課主事)に担当してもらい，町社会教育課職員と文化財保護審議委員が補助するとともに山中悦雄（岡山大学学生），稲井裕子（奈良大学学生）の協力を得て実施した。

この報告書作成にあたっては，日高正晴，山中悦雄（現県文化課主事）両氏に御協力をいただきました。

（繁富　勉）

第２章　地理・歴史的環境

東平下周溝墓群は，川南町北部の唐瀬原台地と呼ばれる標高約５０ｍの台地にある。この２号方形周溝墓は大字川南字東平下19034番３，19035番２に位置している。

尾鈴連山を背景にひらけた川南の平原は，東の方，眼下に日向灘を望み，風光絶佳の環境にある。この地域には，古くから，特に弥生式遺跡について数多くの地点が確認されている。戦前，上代日向研究所の瀬之口伝九郎，樋渡正男両氏は，川南町一帯を調査され，つぎの弥生土器出土地を踏査された。それは，鍛治別府，竹浜，十文字，加勢，唐瀬，沓袋，それに下垂門などであるが(註1)，これらの遺跡からは，櫛目文土器が発見されている。また，昭和29年６月，県教育委員会の主催によって，川南町字把言田の弥生遺跡調査を，石川恒太郎氏と小生が調査員になって発掘調査を行った。そして，弥生後期の住居跡などが発見(註2)された。その後は，最近に至るまで学術調査なども催されることもなかったが，同町在住の遠藤学氏は数年前から遺物散布地の実地踏査をされた結果，約30ヶ所に及ぶ弥生土器散布地を確認されている。小生も数年来の知己であるが，遠藤氏からの連絡により，この方形周溝墓も確認できたのである。この川南町には弥生時代につづいて，古墳時代になると，小丸川の左岸丘陵上に，国指定の川南古墳群が展開している。このように日向中央平野部に位置する川南平原には弥生時代から古墳時代にかけて豊富な遺跡が包蔵されている。

（日　高　正　晴）

注　(1)　瀬之口伝九郎，樋渡正男「日向川南村に於ける弥生式土器」〔考古学雑誌〕34巻８号　昭和19年

(2)　石川恒太郎「川南町把言田遺跡」県文化財調査報告書３　昭和33年

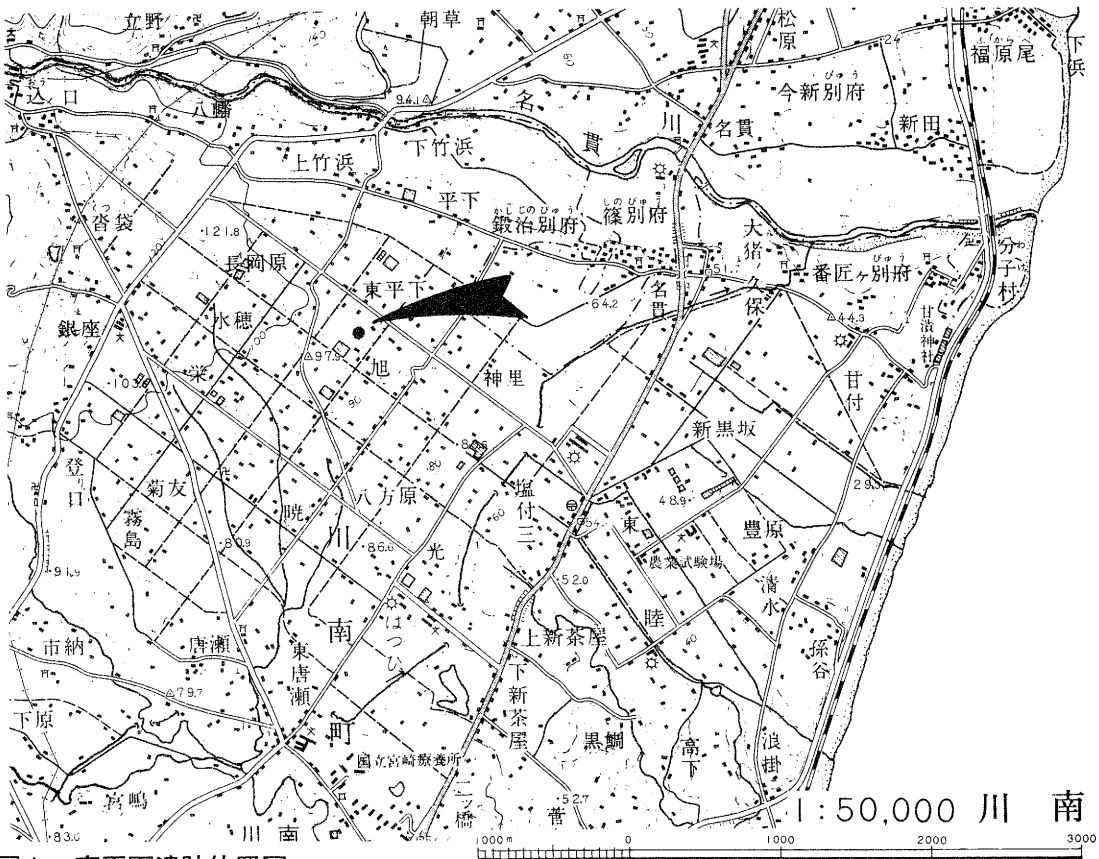


図１　東平下遺跡位置図

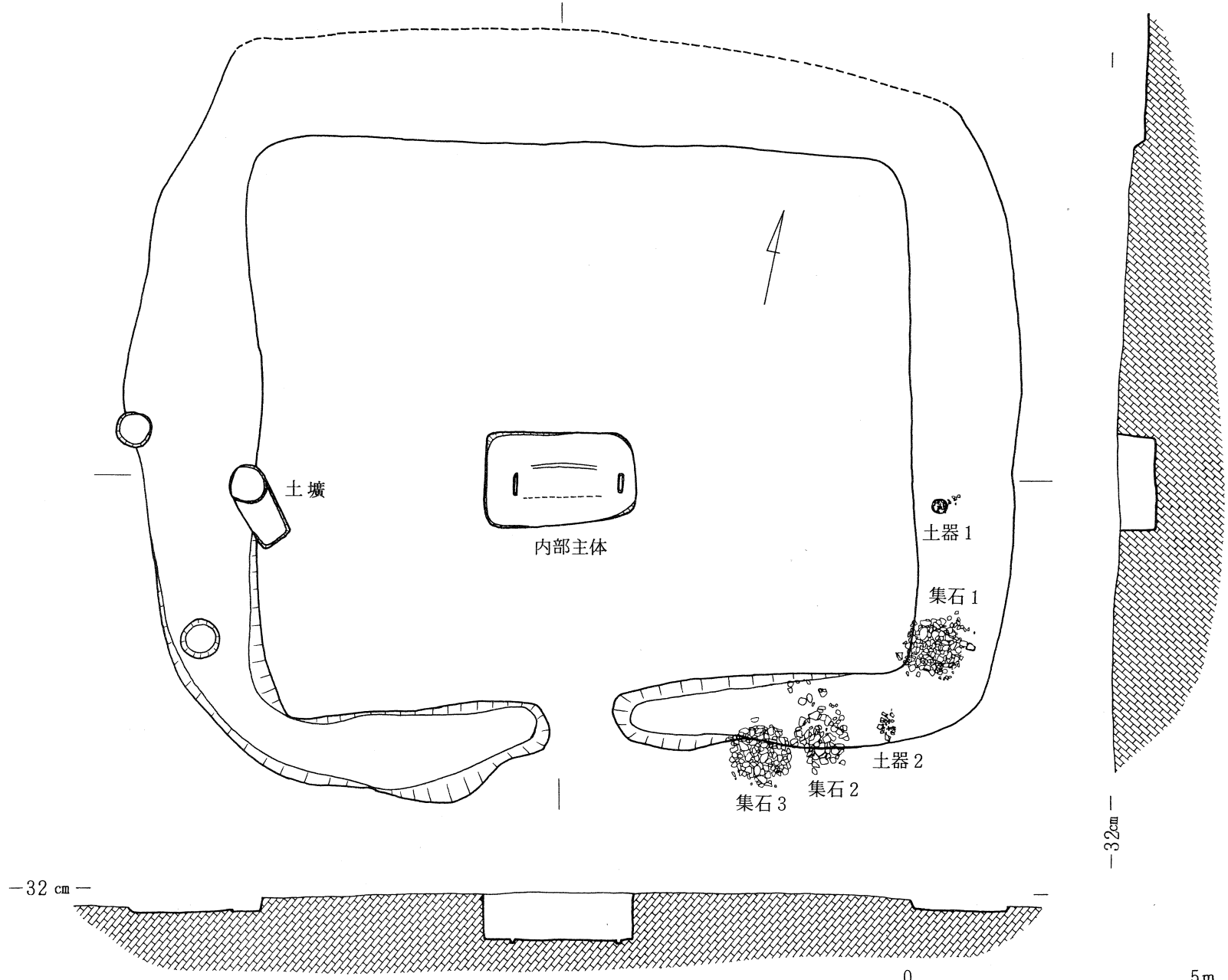


図2　方形周溝墓平面図・断面図

第3章　遺　　構

(1) 概　容　（図2，　図版1）

隅丸の方形状を呈し，南辺中央に陸橋部を有する方形周溝墓である。その方形台状部は南北の中軸線上で9.5m，東西の中軸線では11.4mを測定することができる。そして，その中央部には主体部としての隅丸長方形の土壙墓が確認できた。また，これを取り巻く周溝は南東部で幅が2.2m，深さ（中央部）32cm，東部で約2.0m，深さ20cm，また，反対側の北西部では幅が2.2m，深さ38cmとなっているが北側周溝はその外側がすぐ崖になっているため，その幅は明確に測れなかった。しかし，2.0m近くはあったのではなかろうか。なお，陸橋部を挟んだ両南側周溝の幅は東側で1.05m，西側では1.6mとなっているが，深さは，いずれも，その中央部分で20cm～22cmとなっている。この方形周溝は陸橋の部分で両方ともに細まり，両周溝とも，その端の部分は幅約1mになっている。また，この方形台状部の西端と切り合って，長方形状の土壙が確認できた。そこで考えられることは，この土壙と周溝墓との関係である。出土遺物などの点から，恐らく，この方形周溝墓と前後してつくられたのであろう。さらに，この周溝内の南東部には3ケ所にわたって集石遺構が確認された。だいたい，径10cm～15cmの自然石を50ケ～60ケ集石して円形状を呈している。この遺構は縄文期でも古い時代のものであるので，この周溝墓には直接は関係はないと思われる。しかし，その付近にのみ，弥生式土器が2ケ納置されていたことは，この周溝墓の造営者と集石遺構との関係について一考しなければならないような気もする。

（日　高　正　晴）

(2) 内部主体　（図3，　図版2・3・4）

内部主体は，隅丸長方形墓壙に組合せ式木棺を収めたものである。

墓　壙　墓壙は，現状で長さ2.5m，幅1.5m，深さ70cmを測る。土層は11層確認できた。各層についての説明は，図(3)にゆずりたいが，基本的には(1)～(7)層までの黒褐色埋土と(8)層の朱層，(9)層及び(10)層の4層に大別できる。(1)，(2)層は耕作機械による撹乱土である。(3)層から(7)層までが本来の土壙埋土で，(3)層から(5)層までが柔らかいのに比べ(6)，(7)層は固くしまっている。これは，(6)，(7)層が木棺をまわりからたたきしめた土と考えられるのに対し，(3)，(5)層，なかでも(5)層のうち特に柔らかく空洞のめだつ部分は木棺の痕跡を示している層と考えられる。(8)層は木棺内部に敷かれた朱層で，ほぼ木棺内側全面で確認できるが，西側小口付近で特に厚く，1～2cmの厚さを持つ。(9)層，(10)層は木棺木口掘込みがこの層を切っていることから，木棺安置に先だち、壙底の平坦化を図った層と考えられる。以上の(10)層は，木棺崩壊の不平均等により，かならずしも整合した層序をなしていない。(11)層は地山の黄褐色土である。

木棺　墓壙底に木口板設置の掘り込みを持つもので，掘り込みは東側34×10×8cm，西側40×7×9cmの隅丸長方形である。木口部掘り込み長軸は，墓壙短辺にほぼ平行で，木棺は墓壙に平行に置かれていたことがわかるが，墓壙中心よりいくぶん南側によせて設置されている。木棺側板の痕跡が，北側では

圧痕として，南側では墓壙底に敷かれた土の色の変化として認められた。この側板は，木口掘り込みの外側に位置するので，木棺は両側板で木口板を押さえるタイプのものであったと考えられる。木棺の大きさは，長さ約１７５cm，幅は西側木口でおよそ50cm，東側木口で40cmほど，棺材の厚さは約５cmほどのものと推定される。底板の痕跡は確認できなかった。棺内外に副葬品などは認めることができなかったが，棺底一面に朱を検出することができた。朱は棺西側に特に厚く，次いで東側木口付近に厚い。図(3)平面図において網のかかっている範囲が朱の明瞭に認められる部分で，２重に網のかかっている部分が特に厚く敷かれている範囲である。木口板，側板痕跡が西に広いことと考えあわせれば，遺体頭部が西側にあったことはほぼまちがいがない。

(3) 周　溝

南東周溝土層（図４・６）　第(1)層は肥料混りの褐色土層，第(2)層は濃黒褐色土で，第(6)層の黒褐色土より上の第(5)層同様，耕作機械による撹乱をうけている。第(3)層は溝埋土の淡黒褐色土だが，これも地表下20～30cmまでは部分的に撹乱されていると思われる。第(4)層は赤ホヤの細かなブロックが混じった褐色土層で，第(5)層は赤ホヤである。この(4)層と(5)層は溝掘削時の地山と考えられ，その間を溝幅とすれば2.4ｍを測る。第(7)層は褐色土で溝埋土と考えられるが，地山である可能性も捨てきれない。

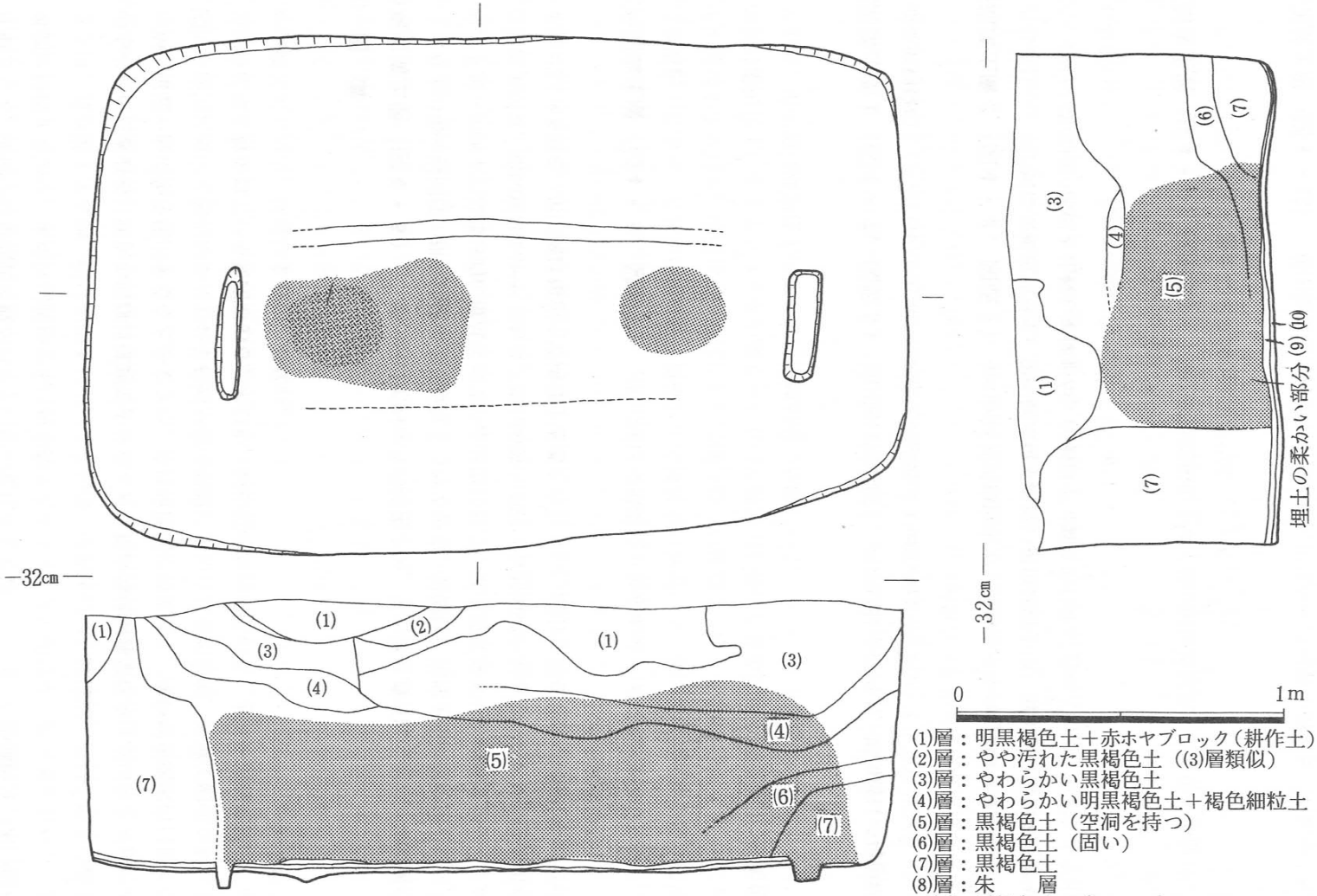
北西周溝土層（図４・５，図版５）　第(1)層は淡黒褐色土に赤ホヤブロックの混じった層で，第(2)層は淡黒色土である。これらの層は耕作機械による撹乱をうけている。第(3)層は周溝墓を覆う濃黒色土，第(4)層は赤ホヤ層で，周溝はこの層位において掘り込みが確認できる。その幅は約 2.2 ｍである。第(5)層は濃褐色土に赤ホヤブロックの混じったもので溝埋土と考えられる。第(6)層は地山の濃褐色粘質土である。第(7)層は淡黒色土に赤ホヤの細粒が混った層。

南周溝土層１（図４・７，図版５）　第(1)層は濃褐色土，第(2)層は淡褐色土，第(3)層は淡褐色粘質土に赤ホヤ細粒のまじったものである。この部分の溝幅は１ｍ60cmほどである。

南周溝土層２（図４・８，図版６）　第(1)層は濃黒褐色土で一部赤ホヤを含むがスキ返しをうけていると思われる。第(2)層は淡褐色粘質土。第(3)層は粒子の荒い褐色砂質土で，第(4)層は黄褐色粘質土である。この部分の溝は他の部位と比較して深いが，(3)層以下は縄文時代集石遺構と関連したピットであるかもしれない。

北周溝土層（図４・９，図版６）　第(1)層は濃褐色土で，第(2)層は淡褐色土に赤ホヤの混じった土である。この北側はすぐに崖となっており溝幅は明確にできなかった。

東周溝土層（図４・10）　第(1)層は濃黒褐色土。第(2)層は黒褐色土に褐色土のまざった層で，第(3)層は褐色土に黄褐色土のまざった土層である。第(4)層は褐色土で第(5)層は黄褐色土である。



(1)層：明黒褐色土＋赤ホヤブロック（耕作土）
(2)層：やや汚れた黒褐色土（(3)層類似）
(3)層：やわらかい黒褐色土
(4)層：やわらかい明黒褐色土＋褐色細粒土
(5)層：黒褐色土（空洞を持つ）
(6)層：黒褐色土（固い）
(7)層：黒褐色土
(8)層：朱　　層
(9)層：黒褐色土＋赤ホヤブロック
(10)層：黒褐色土
(11)層：黄褐色土（地山）

図3　内部主体平面図・土層図

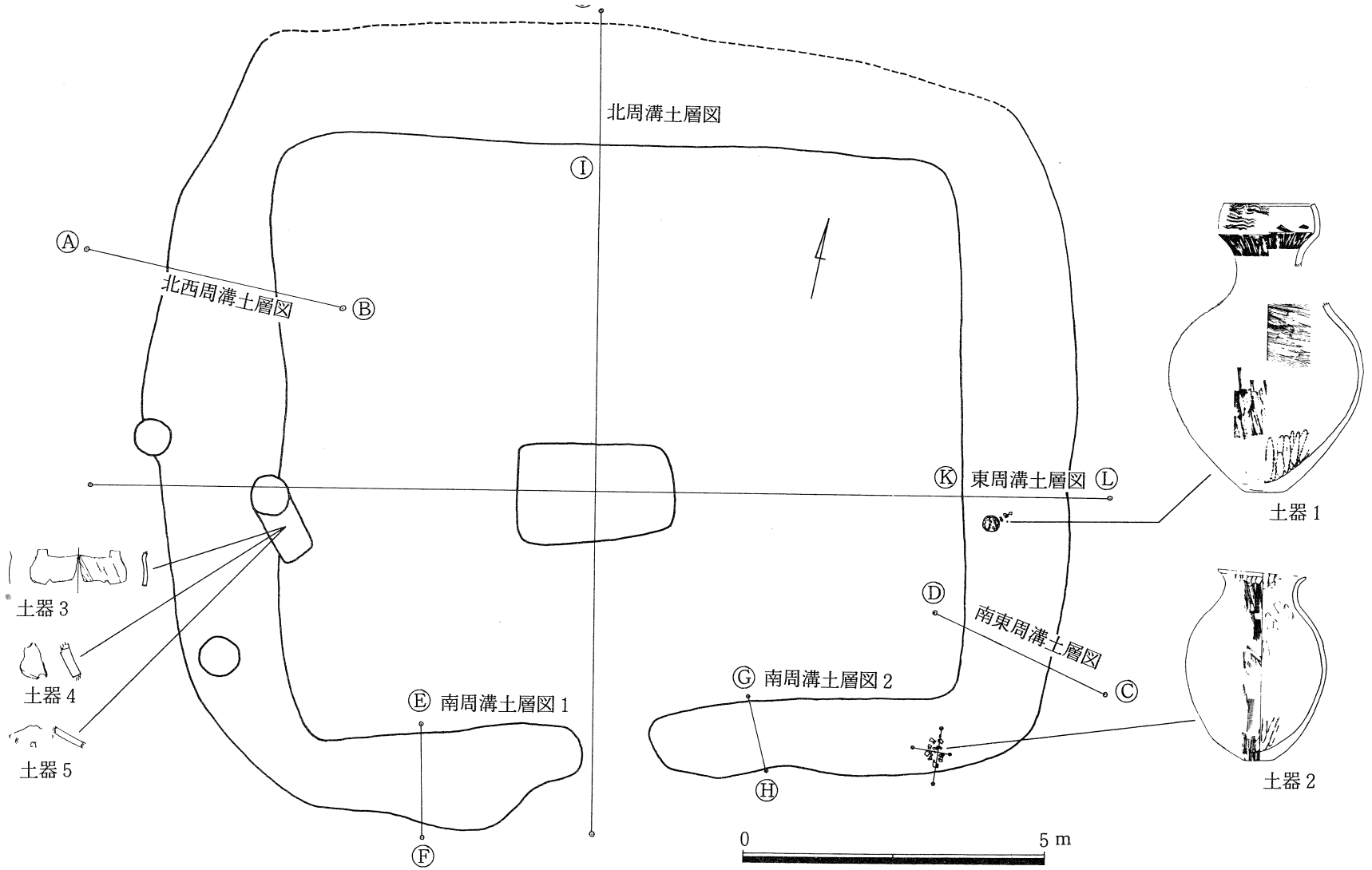


図 4　方形周溝墓・周溝土層図位置及び土器出土位置

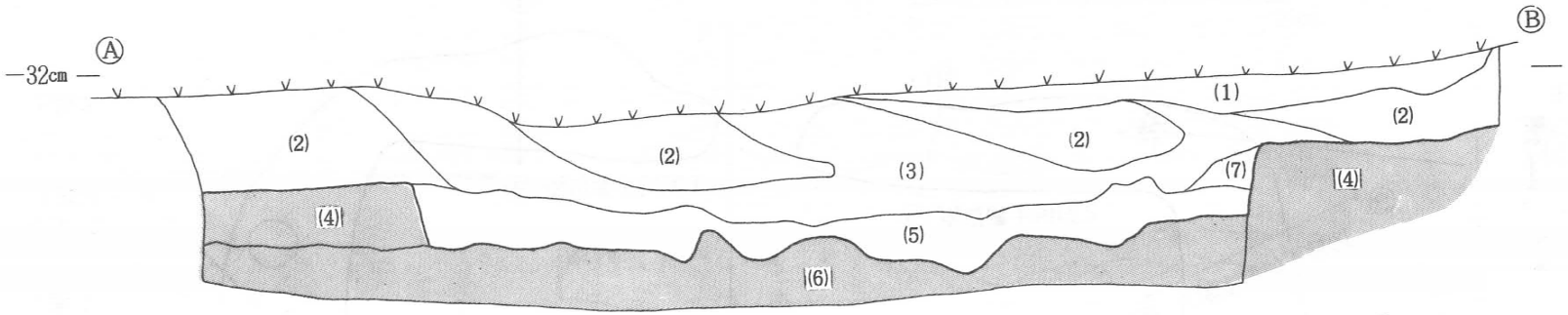


図 5　北西周溝土層図

(1) 淡黒褐色土＋赤ホヤブロック
(2) 淡黒褐色土
(3) 濃黒褐色土
(4) 赤ホヤ
(5) 濃黒褐色土＋赤ホヤブロック
(6) 濃黒褐色粘質土
(7) 褐色粘質土

0　1 m

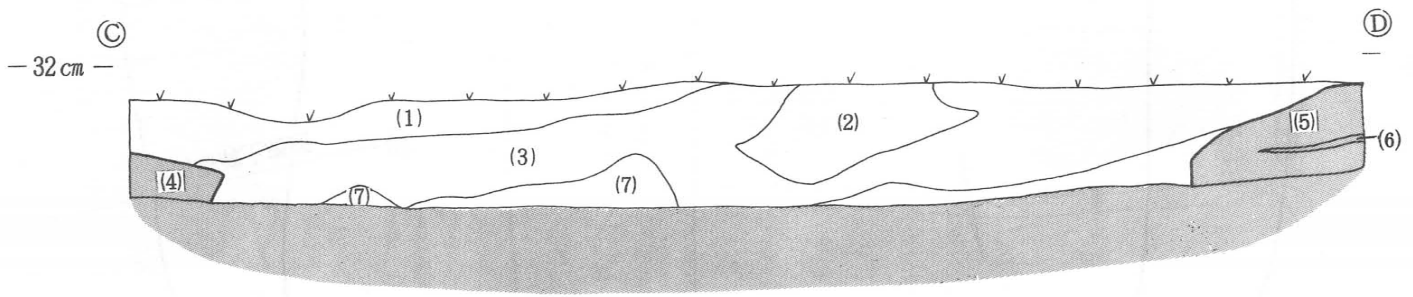


図 6　南東周溝土層図

(1) 褐色土
(2) 濃黒褐色土
(3) 淡黒褐色土
(4) 褐色土＋赤ホヤ細粒
(5) 赤ホヤ
(6) 黒褐色土
(7) 褐色粘質土

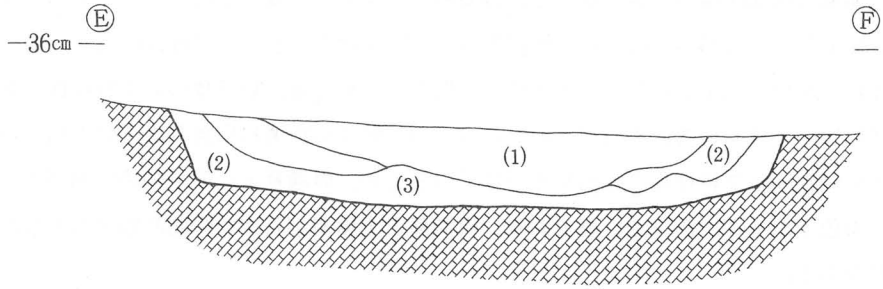


図 7　南周溝土層図 1

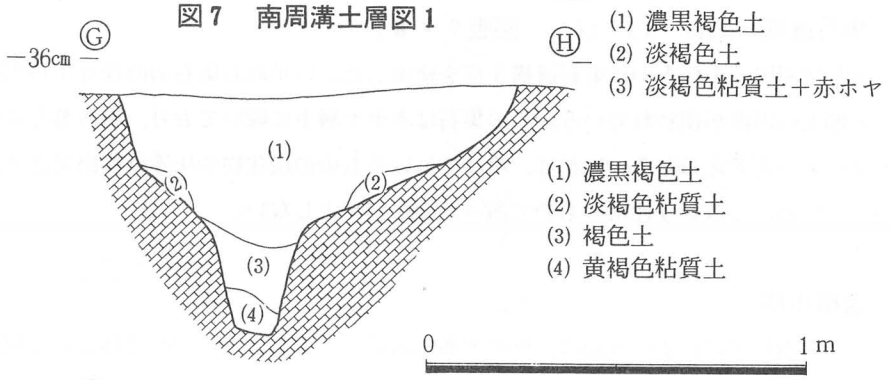


図 8　南周溝土層図 2

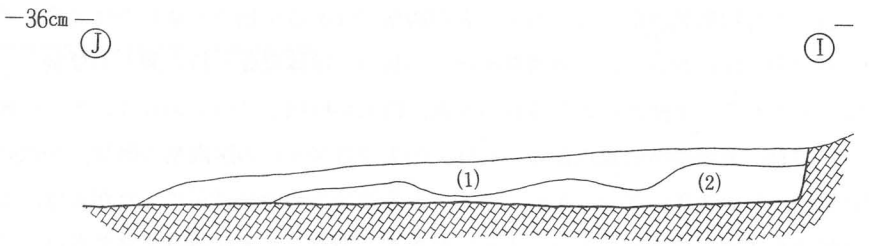


図 9　北周溝土層図

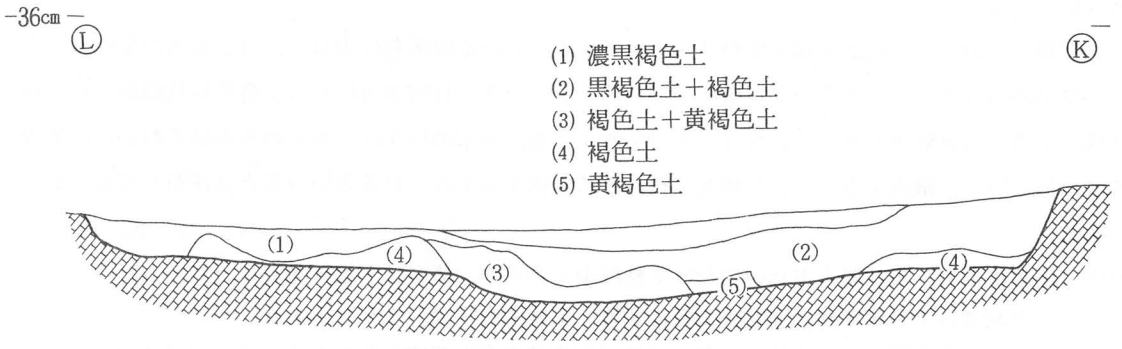


図10　東周溝土層図

(4) 土 壙 （図11, 図版7）

周溝墓台状部西端から溝にかけて，周溝墓と切りあう土壙を検出した。イモ穴によって北西部を撹乱されており全長はわからないが，短辺の長さは約60cmをはかる。長軸は南東－北西である。遺物は，土器片が3片ほど出土したが，イモ穴による撹乱のため土壙，周溝墓のいずれに伴うものか不明である。小破片なので詳しい器形や時期はわからないが，胎土や色調は周溝墓出土の土器とほとんどかわらない。赤ホヤ層上面まで耕作による撹乱をうけているため，周溝墓との前後関係は判然としない。周囲にも同様の黒色土おちこみが確認されており，周溝墓と土壙墓が若干の時間的幅をもちながら共存している可能性がある。

(5) 集石遺構（図12・13・14, 図版7・8）

東及び南周溝を精査中に集石遺構3基を検出した。いずれも集石の直径は1m程度のもので，挙大から人頭大の円礫が使われている。この集石は赤ホヤ層下に続いており，周溝墓とは関連しない縄文早・前期のものと考えられる。集石は，焼けてはいるものの炭化物や灰等は検出できず，遺物も伴っていなかったため，どういう性格のものであったのか判然としない。

(6) 遺構小結

2号周溝墓で注目すべき点は，単体埋葬であるということと，内部主体として組合せ式木棺を採用していることだろう。東平下周溝墓群は，確認されているだけで7基から構成されるが，1980年に調査された1号円形周溝墓はもちろん，表面観察ではあるが他の5基も単体埋葬と考えて良い。このことは，日向中央部においては(註1)，周溝墓をその当初から単体埋葬＝特定個人の墓制として受容した可能性を指唆してくれる。集団内における有力家族，個人が析出してゆく過程は，すでに種々論じられているように，墳墓の発展段階的観点からみれば，(1)集団墓域からの区画墓の離脱，(2)区画墓の単体埋葬化，(3)埋葬施設の質的変化の3つに集約できる。近藤義郎氏の段階設定にしたがえば，2号周溝墓は第3段階の4類として把握できる。1974年に県教委の調査した大萩遺跡土壙墓群は(註2)(註3)，2号周溝墓と一部時期的に重なる弥生終末期を中心とした集団墓であるが，その中に不均等がみられ(註4)第2段階に比定できる。両者を日向地方海岸部と山間部という対比でみるとき，そこから社会発展の隔差という新しい問題が提起されてくる。

九州地方において，内部主体に組合せ式木棺を採用している周溝墓は少なく，ほとんどが集団墓からの系譜を認めることができる箱式石棺を内部主体としている。日向地方における弥生時代墓制―特に海岸部―がほとんど解明されてない現在，その系譜を在地，外来のいずれにもとめるかはこれからの調査をまつ他ないが，畿内を中心とした地域に組合せ式木棺が多くみられるということは注意しておく必要がある。

（山 中 悦 雄）

註(1) 県教委調査。現在報告書刊行にむけて整理中であるが，概容は下記に発表されている。
「宮崎考古学会第9回研究発表会発表要旨」宮崎考古学会 1981・8
なお，出土土器については，一部，「第11回埋蔵文化財研究会資料」1982に発表されている。

註(2) 近藤義郎 「前方後円墳の成立と変遷」『考古学研究』57号 1968

註(3) 〃 「古墳以前の墳丘墓」『岡山大学法文学部紀要』 1977

註(4) 『大萩遺跡 (1)』 宮崎県教育委員会 1974

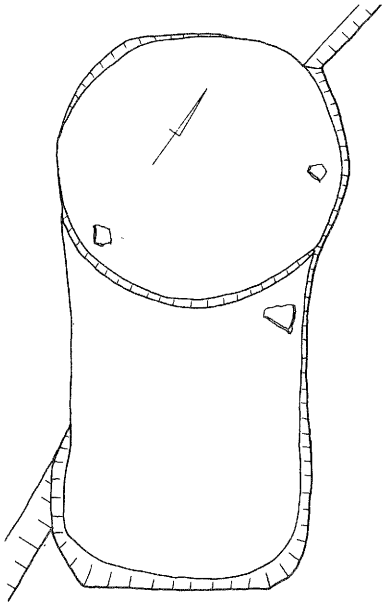


図11　土　壙

図12　集石 1

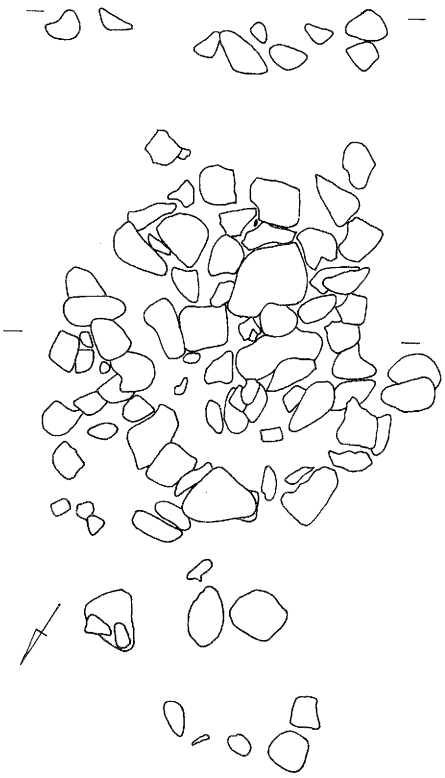


図13　集石 2

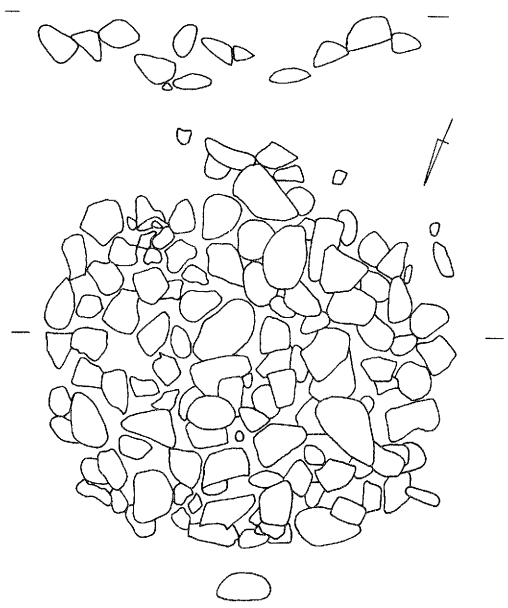


図14　集石 3

第4章　遺　　物

内部主体に遺物は皆無であった。周溝溝底から完型に復元できる壷2個体と，土壙から若干の土器片が出土したのみで遺物の量は少ない。

(1) 遺物各説

土器1（図4・15・17—1，図版9・10）　東側周溝底中央部から正立した状態で出土した。口縁部及び肩上部は胴内部に崩落していた。頸部下半が欠落しており，胴部と口縁部は直接には接合しない。実測図では長頸壷として復元してあるが，実際には頸部が若干短かくなる可能性がある。器高は実測図復元で38.2cm，口唇部径12cm，胴部最大径25.7cm，底部径は5.5cmを測る。底部はシャープさを欠く平底で，底部から胴下半部にかけて黒斑が認められる。胴部は球形ぎみだが，中央より若干上で曲率がかわり直立ぎみの頸部へと続く。頸部はゆるく外反し，口縁部との境でだれた稜線を作る。口縁部は内側へゆるく湾曲しており，二重口縁というよりも袋状を呈する。口唇部は内側へ傾く5mm程度の平坦面をもつ。

胎土は1mm大の砂粒を多く含むが細かい。焼成はいくぶん甘く，色調は淡黄褐色を呈する。胴部外面の下半7cmほどは刷毛目原体様のもので削りぎみに整形したあとナデ調整されている。胴中央部は5本／7mmほどの原体で刷毛目が縦位に施こされ，部分的にナデ消される。胴上半部はナデ調整される。頸部には，縦位に下から上へ0.5mm間隔の細かな刷毛目が施こされている。口縁部外面はナデ調整のあと2mm間隔4本単位の櫛描波状文が時計廻りに施文されるが，これは連続しては施文されず，2～3cm単位で複雑に切りあっている。波状文の形も正弦波状のものや簾状のものがあり一定せず，非常にくずれた感じを与える。口縁部内側は細かな斜行刷毛目のあとナデ調整がおこなわれる。頸部内面にも同様に縦位の刷毛目が施こされるが，下半部はナデ消されている。肩から胴中央にかけては外面と同様頸部刷毛目より荒い斜行刷毛目である。胴下半から底部にかけては，指頭によるナデあげが施こされる。

土器2（図4・16・17—2，図版9・10）　東周溝南端溝底から横だおしでつぶれて出土した。ほぼ完形に復元でき，その場でつぶれた状態を示していた。器高24.5cm，胴部最大径18.5cm，器厚0.5cm，底部径4cm，口縁部径11.8cmの単口縁壷である。底部は丸底ぎみの平底で，胴部最大径はほぼ中央にある。頸部から口縁にかけてゆるく外反し，口縁端部は丸くおさまる。器形は全体的にゆがんでおり1に比べれば粗製の壷である。

胎土は1～2mm程度の砂粒を多く含み荒い。色調は淡褐色を呈し，胴部外面下部に径約1cmの，内面下半から底部にかけて径約10cmの黒斑が認められる。焼成，保存とも良好である。外面は原体幅1cm程度のこまかな縦刷毛目調整のあとナデ消されており，部分的に刷毛目が残る。口唇部は指頭によるつまみ整形された後ナデ調整が施されている。内面下半部は指によるナデあげ調整，肩部は刷毛目原体状のものによる軽いなであげの後に指頭圧痕が残る。胴部中央内面はナデ調整と思われる。

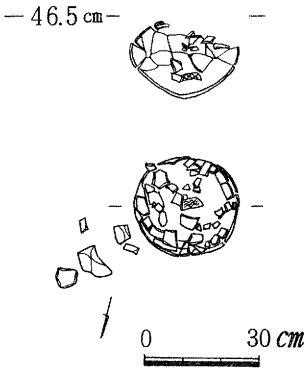


図15　土器1出土状態

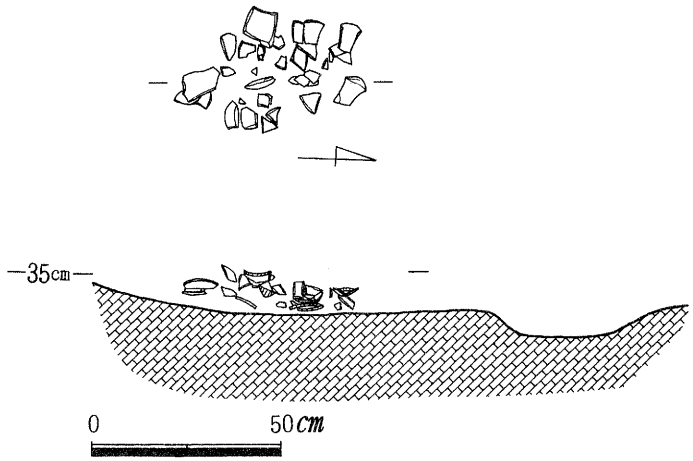


図16　土器2出土状態

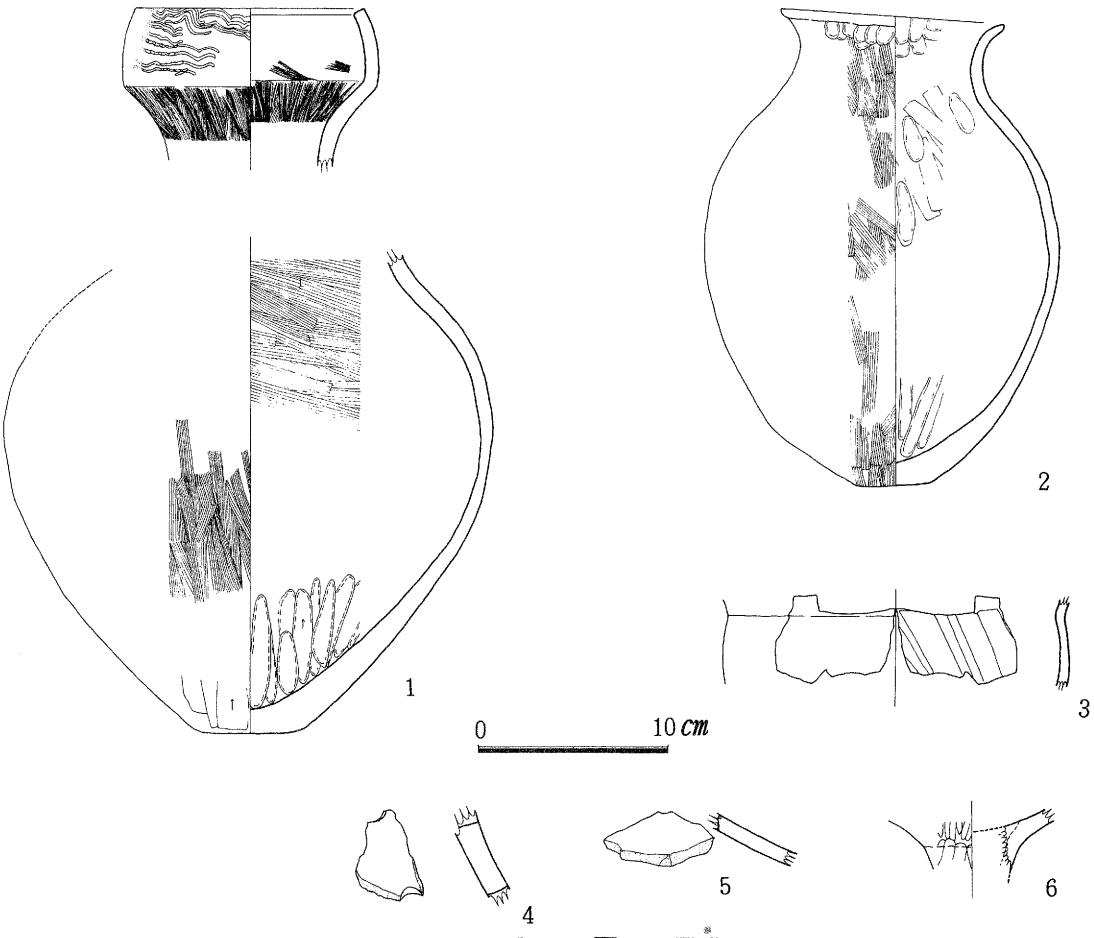


図17　周溝・土壙出土土器

土器3 （図4・17—3） 土壙出土。小型甕あるいは鉢の胴部から口縁部にかけての破片で，遺存は全体の10分の1程度である。胴部最大径は，胴部と口縁部の境から約2*cm*さがったところにあり，推定復元径は約18*cm*である。

色調は淡黄褐色を呈し，胎土には5mm程度の砂粒を若干含む。焼成は良好で保存度も良い。胴部外面と口縁部内面は指ナデと思われるが，口縁部外面と胴部内面は，幅1.5*cm*ほどの刷毛目原体状のものによりナデあげられており，外面ではそれによる段差が胴部と口縁部との境いをなす。

土器4 （図4・17—4） 土壙出土。小破片だが透し穴が2つあり，器壁の厚さと曲率から器台の脚部と考えられる。

胎土はやや荒く，2mm前後の砂粒を比較的多く含む。色調は淡黄褐色である。風化が激しく調整方法は不明である。

土器5 （図4・17—5） 土壙から出土。透し穴があり大型の高杯脚部と思われる。

胎土は1mmほどの砂粒を含み精選されたものではない。色調は内面淡黄褐色で外面は淡褐色を呈する。風化が激しく調整方法は判然としない。

土器6 （図17—6） 周溝内出土だが詳しい出土位置は不明である。形態から高杯の軸部から脚すそ部にかけての破片としたいところだが，坏部充てん痕が認められるので軸部から坏部にかけての破片と思われる。遺存率は約3分の1で，図上復元すれば軸部径4*cm*を測る。

焼成は良好で，胎土は2mm前後の砂粒を含みやや荒い。色調は，外面明黄褐色，内面淡黄褐色である。軸部外面及び坏部内外面ともヘラ磨き調整が施こされているが，軸部のヘラ磨き幅は約7mm，坏部は約3mmで，軸部の方が荒い調整である。

(2) 遺物小結

2号周溝墓出土の土器をどの時期に位置ずけするかという問題は，日向地方の土器編年が充分になされていない現状では困難なことである。ここでは1号円形周溝墓出土の土器をも考慮にいれ，いろいろな可能性を検討してみたい。

土器1，2に共通する調整方法は，内面のナデと外面の細かな刷毛目およびそれのナデ消しである。大野川上・中流域を中心とした豊後の土器編年では，この調整は第Ⅴ期—庄内式（新）～布留式（最古）期—の特徴とされる。複合口縁壺の櫛描波状文の出現はⅡ期—後期中葉—からと考えられているが，(註1)土器1における波状文は非常に粗雑で退化した印象を与える。土器1の肩から頸部にかけてのたちあがり(註2)は，中部瀬戸内における上東式から酒津式にかけての壺に比較的類似性をみいだすことができる。二重口縁というよりは袋状口縁に近い口縁部はほとんど直立しており，外反する一歩手前ともうけとれる形態を示している。図示することができなかったが，1号周溝墓周溝出土の装飾高杯は，杯部，脚部とも浅くかつ大きく外反しており，軸部が空洞化していることもあわせて，この型式としては(註3)比較的新しいタイプのものである。竹管文を脚部に施文する同一タイプの装飾高杯が大分県浜遺跡から出土してい(註4)

るが，坏部，脚部とも大きく外反するこのタイプの高坏は，岡山県谷尻遺跡[註5]や大阪府上田町遺跡出土のものに類似しており，前者はⅨ期[註6]—後期後半—に，後者は上田町Ⅱ式[註6]—古墳初頭—に位置ずけられている。以上のように，１号円形周溝墓出土の装飾高杯は，弥生後期後半を上限に，古墳初頭を下限におく，弥生時代終末期頃に比定できそうである。２号周溝墓出土土器の特徴も大きくは，この年代観の中に収まる要素をもつので，２号周溝墓の時期も，１号周溝墓のそれに大きく前後することのない時期を考えれば，弥生終末期と比定しておくのが無難だろう。詳しい土器編年については，近い将来刊行が予定されている１号周溝墓の報告書に期待したい。　　（山　中　悦　雄）

註１　高橋徹「廃棄された鏡片—豊後における弥生時代の終焉—」『古文化談叢』第６集　１９７９

註２　羽田野光洋「東九州地方における弥生式土器研究Ⅰ—安国寺式土器の再検討—」
『古文化談叢』第５集　１９７８

註３　『第11回埋蔵文化財研究会資料』　１９８２

註４　原口正三氏に御教示いただいたが充分に理解しえたかについては自信がない。

註５　『浜遺跡—大分県文化財調査報告第48輯—』大分県教育委員会　１９８０

註６　高橋護「弥生土器—山陽４」『考古学ジャーナル』１８１　　１９８０
なお，狐塚省三氏からは，酒津式併行—弥生時代終末期との御教示を得た。

註７　原口正三「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立島上高等学校研究紀要』
復刊第３号　　１９６８

第５章　ま　と　め

宮崎県において，本格的な方形周溝墓の発掘調査は，この東平下遺跡をもって嚆矢とするが，実は，昭和39年に，県教育委員会の主催にて発掘調査が行われた都城市年見川遺跡において，当時，住居跡の遺構とみなされていたものが，その後の調査結果で，方形周溝墓ではないかということになり，その当時，方形周溝墓の南限地として注目された。

また，現在，発掘調査が進められている学園都市遺跡においても，中央部に土壙は有しないが東平下遺跡と同一年代頃の方形周溝墓が１基発見されている。以上の２基の方形周溝墓については，まだ，正式の報告書が出されていないので委細はそれらに依らなければ明らかになしえない。ところで，九州地方においても，昭和40年代後半頃から方形周溝墓の発見例が報ぜられるようになった。まず，昭和47年，熊本県の九州縦貫自動車道建設用地内の塚原古墳群[1]地帯から39基の方形周溝墓が発見された。しかし，その造営年代は５世紀代とされている。また，福岡県恵子若山[2]遺跡，および同県夜須町大字三並の八並遺跡などにおいても方形周溝墓が昭和40年代に発見されたが，５世紀前半頃の年代に比定されている。さらに，大分県では最初の発見とされた玖珠町おごもり[3]遺跡の方形周溝墓，そして，宇佐の方形周溝墓[4]にしても，それぞれ，古墳時代の造営になるものである。なお，昭和55年に行われた福岡市藤崎[5]遺跡の

発掘調査では10基の方形周溝墓が発見されたが，従来，九州地域で発見された方形周溝墓の年代より少しさかのぼり，４世紀の後半に比定された。以上，九州における主な方形周溝墓の発見例について論述してきたが，つぎに，この東平下遺跡の方形周溝墓の編年について考えてみたいと思う。その際，決め手となるのは周溝東南部から出土した二重口縁状の壷形，および甕形の２ヶの弥生式土器である。この様式の土器は，いわゆる安国寺形式に相当するものであり，東九州弥生式土器編年では第５様式に比定されるものである。また，この様式は畿内地方の弥生式土器とも相互関係を有しているようである。[6] そのように考察できるとすれば，この東平下遺跡を弥生終末期頃に比定することができる。ところで，方形台上部の中央に土壙墓を有する方形周溝墓としては，従来，発見された遺構は，すべて古墳時代に比定されたわけで，その編年の側面から考えると，現段階では，九州での最も古い方形周溝墓ということになる。しかし，今後，北九州地方に弥生期の古い周溝墓が出現する可能性もあるので，このことが日向地方の特有性になるのかどうか疑問を有するところである。いずれにしても，この川南の平原に群在する弥生時代の遺跡，なかんずく，多数，認められる方形，（円形）周溝墓は，日向古墳文化形成の直前にあたる在地墓制であり，高塚古墳文化に対する共同社会遺構でもある。この東平下遺跡の南の方，小丸川流域には川南古墳群，高鍋古墳群などが存在するので，それらとの関連性なども考えなければならないのであるが，古墳時代まで，その墓制が引き継がれている方形周溝墓は，副葬品などの点では類似性を有してはいるが，本質的に，両者は異っているようでもある。とにかく，この一帯は，古く子湯県と称された地域であり，また，この遺跡は西都原古代文化圏成立前夜の原始墓制でもあるわけで，弥生終末期前後の日向古代文化解明の重要遺跡といわなければならない。この周溝墓の意義については，前年，隣接して発掘調査した円形周溝墓とともに考察しながら論述したいと思う。

（日　高　正　晴）

註

(1) 『塚　原』（熊本県文化財調査報告書第16集）熊本県教育委員会　１９７５

(2) 高倉洋彰「福岡県恵子若山遺跡の方形周溝墓」『古文化談叢』４集　１９７８

(3) 渋谷忠章「大分県玖珠町発見の方形周溝墓について」『　〃　』　〃

(4) 酒井仁夫「八並遺跡検出周溝墓について」『九州考古学』No.52　１９７６

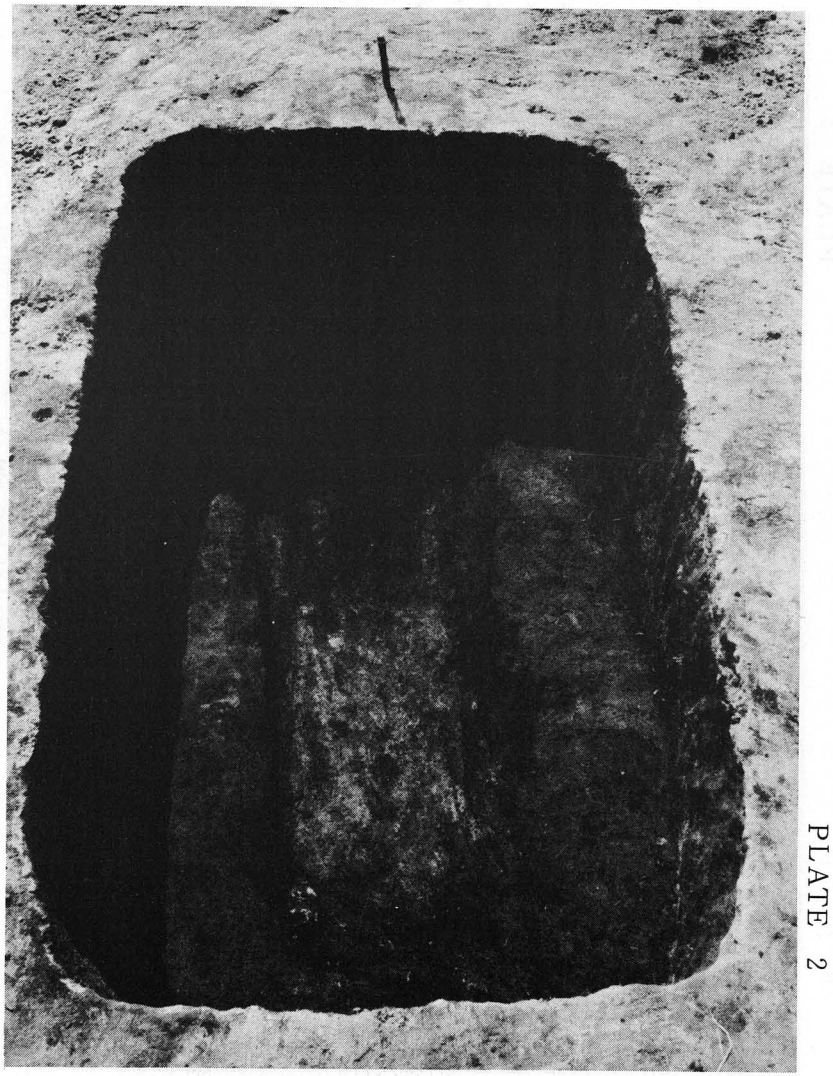
(5) 浜石哲也「方形周溝墓出土の鏡・福岡市福崎遺跡」『考古学ジャーナル』１８５　　１９８１

(6) 森貞次郎『弥生式土器集成』本編１　１９６４

図　　版

図版1

周溝墓全景（上　南から・下　東から）

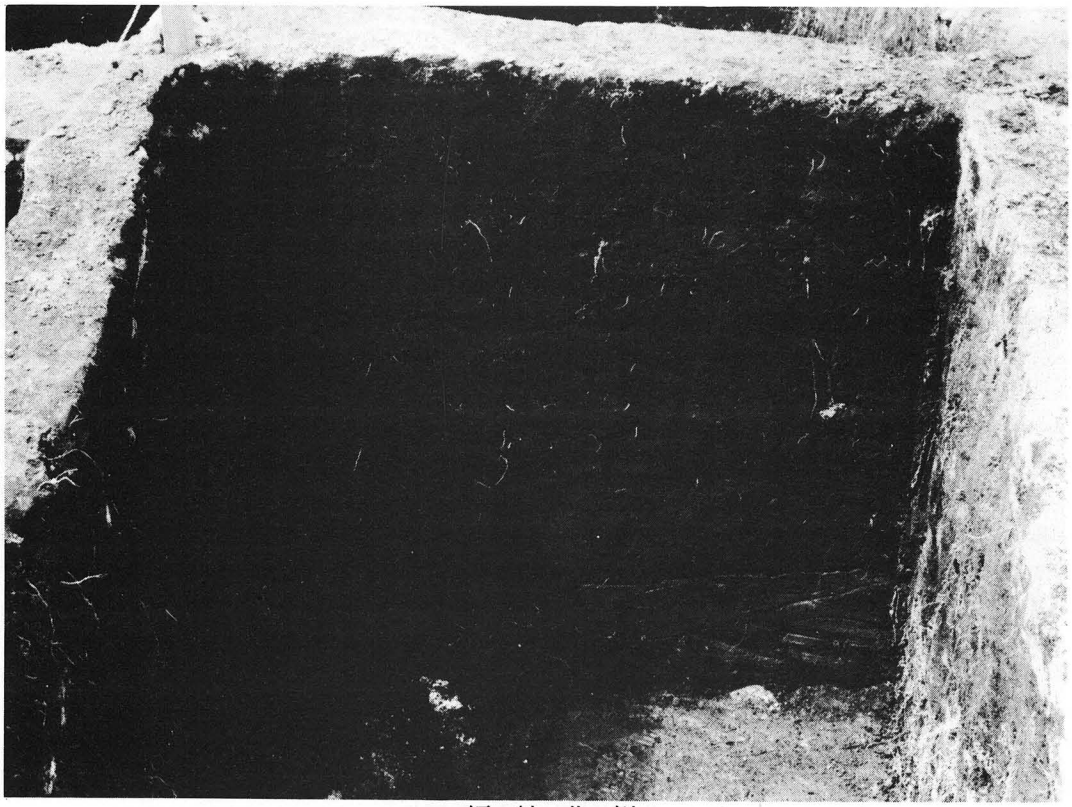


図版2　周溝墓内部主体　左　木棺痕跡　右　墓　壙（東から）

図版3

長軸西側

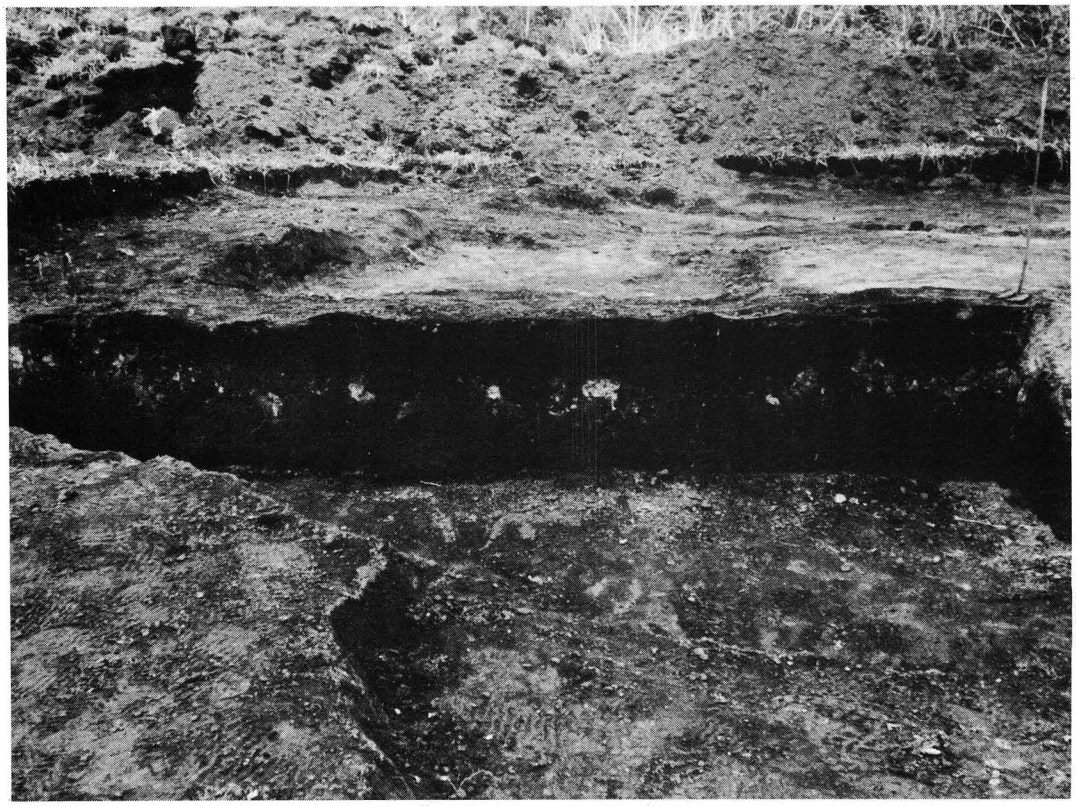
内部主体土層　　長軸東側



短 軸 北 側

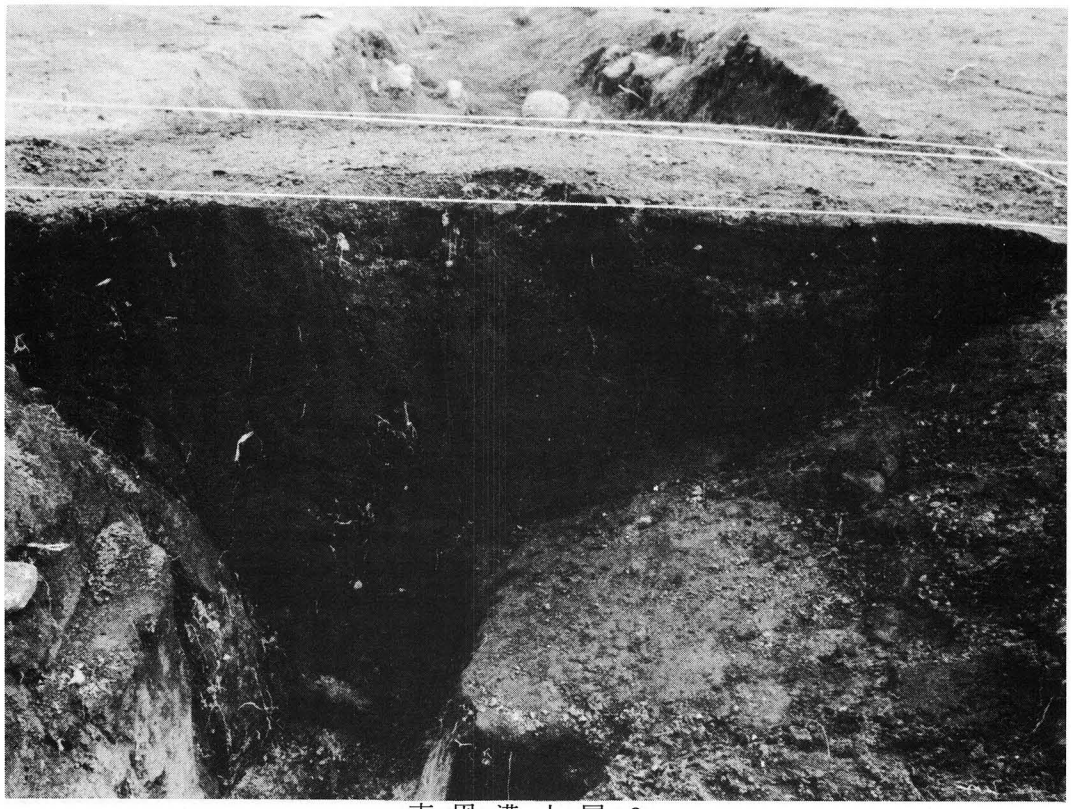
内 部 主 体 土 層　　短軸南側

図版5

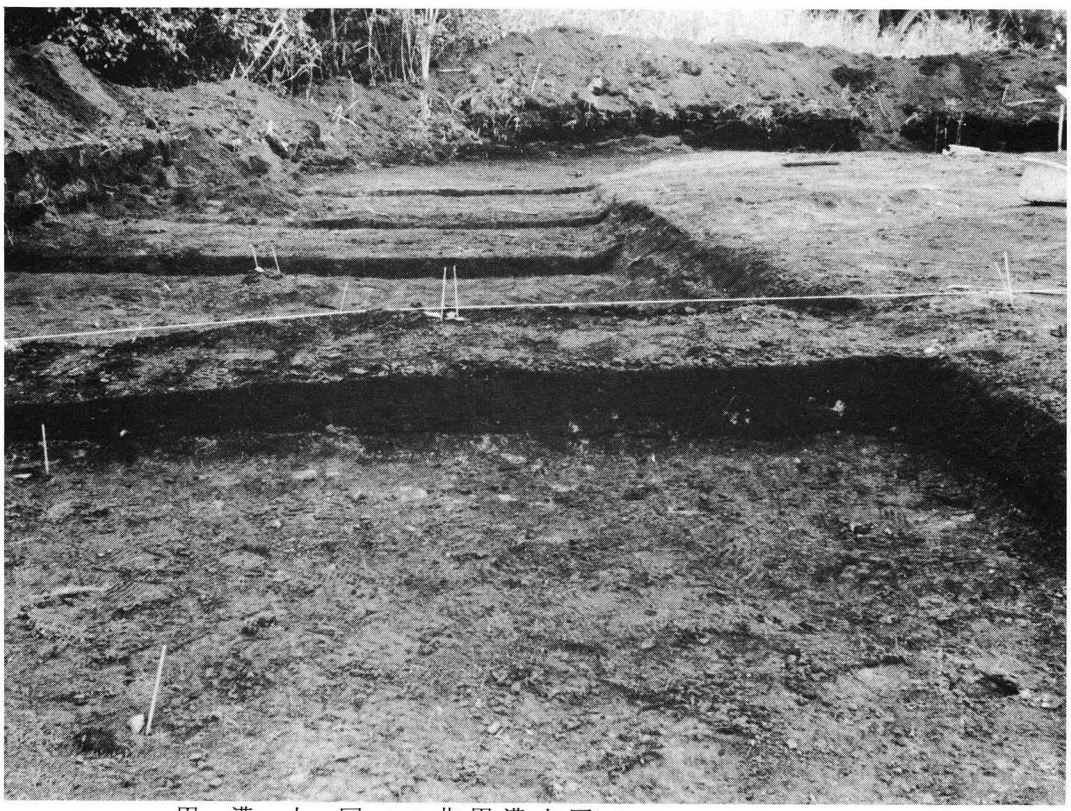


北西周溝土層

周溝土層　　南周溝土層1

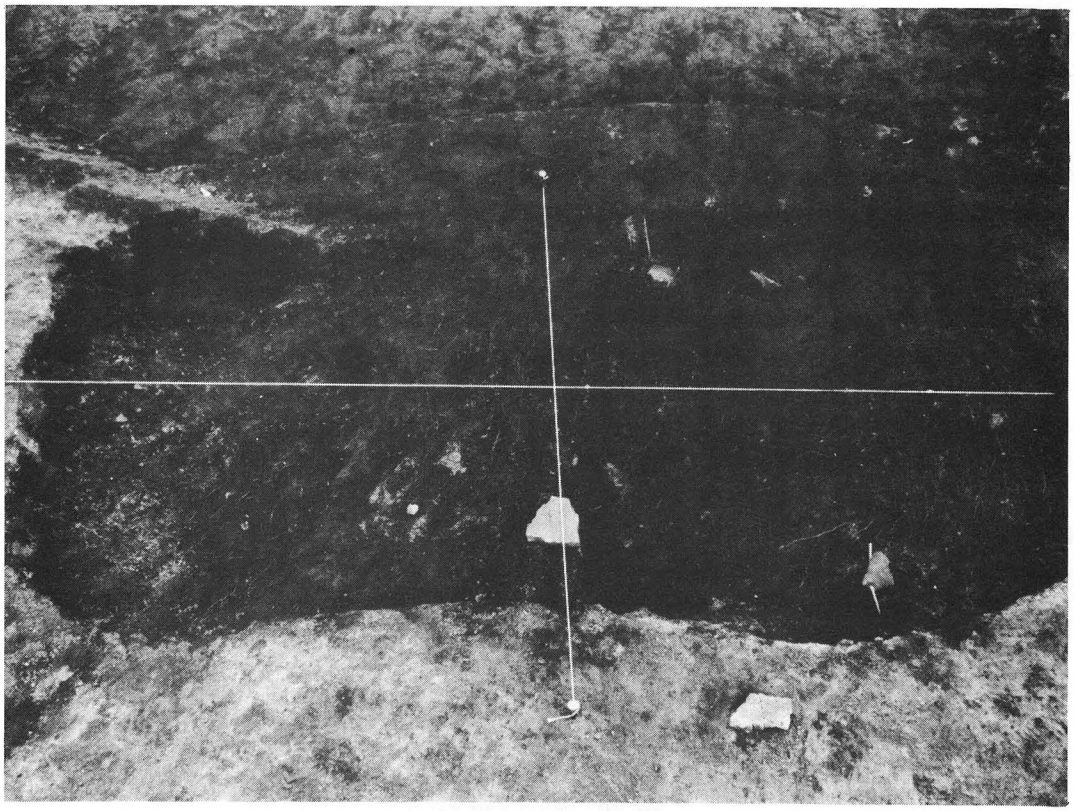


南周溝土層2



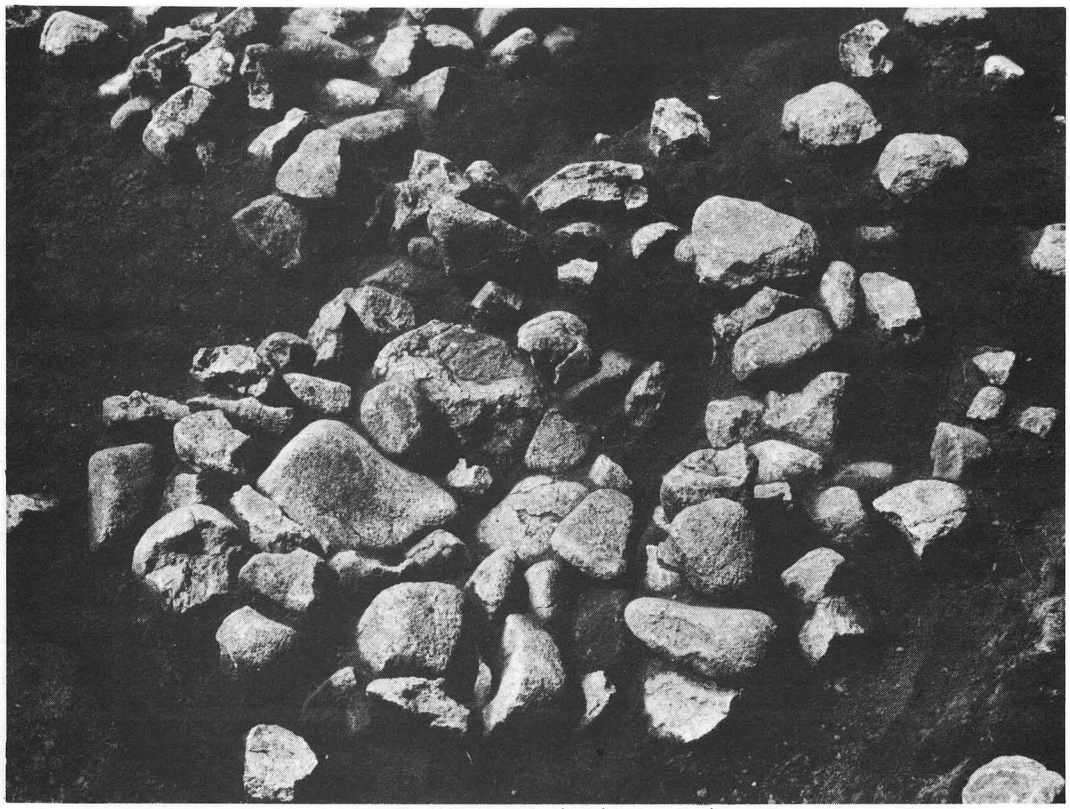
周溝土層　　北周溝土層

図版7



土壙（東から）

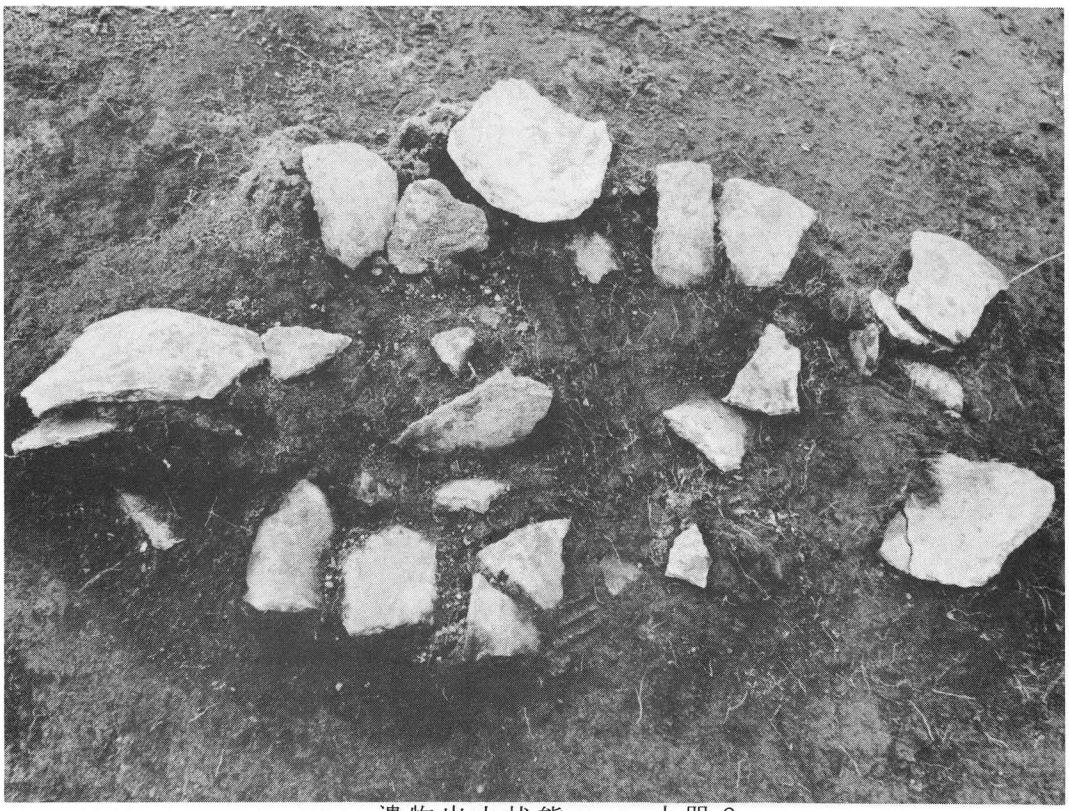
集石1（南から）



集石2（南東から）

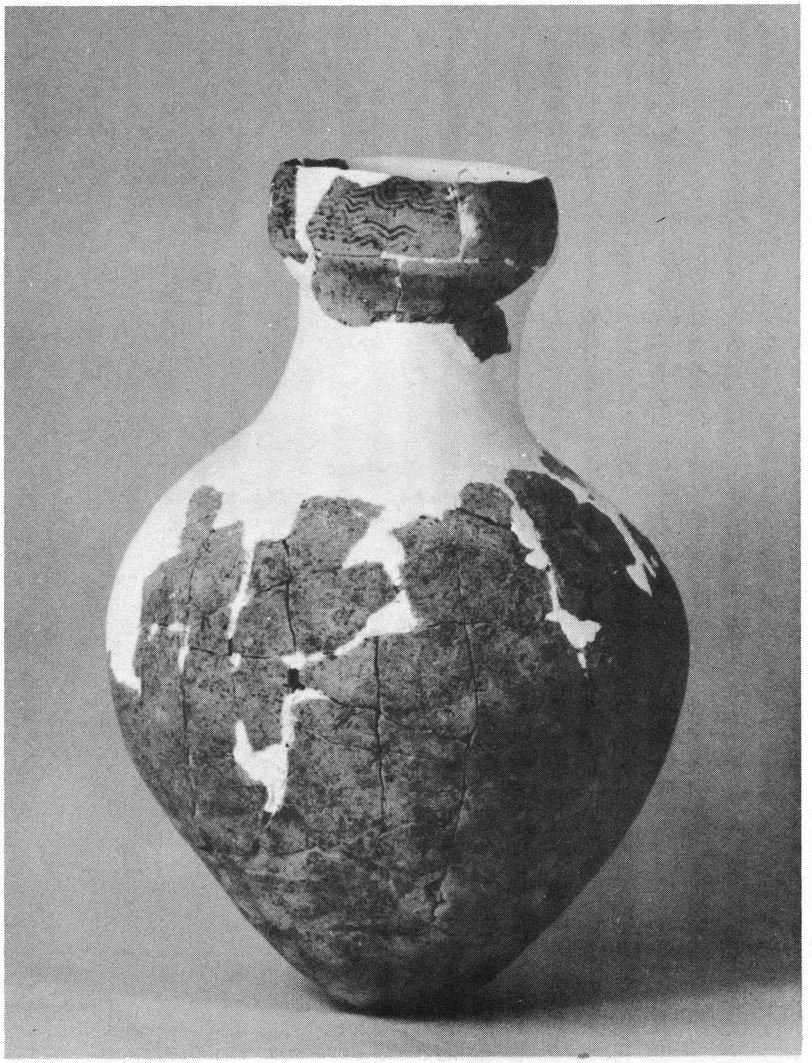
集石3（南から）

土器1

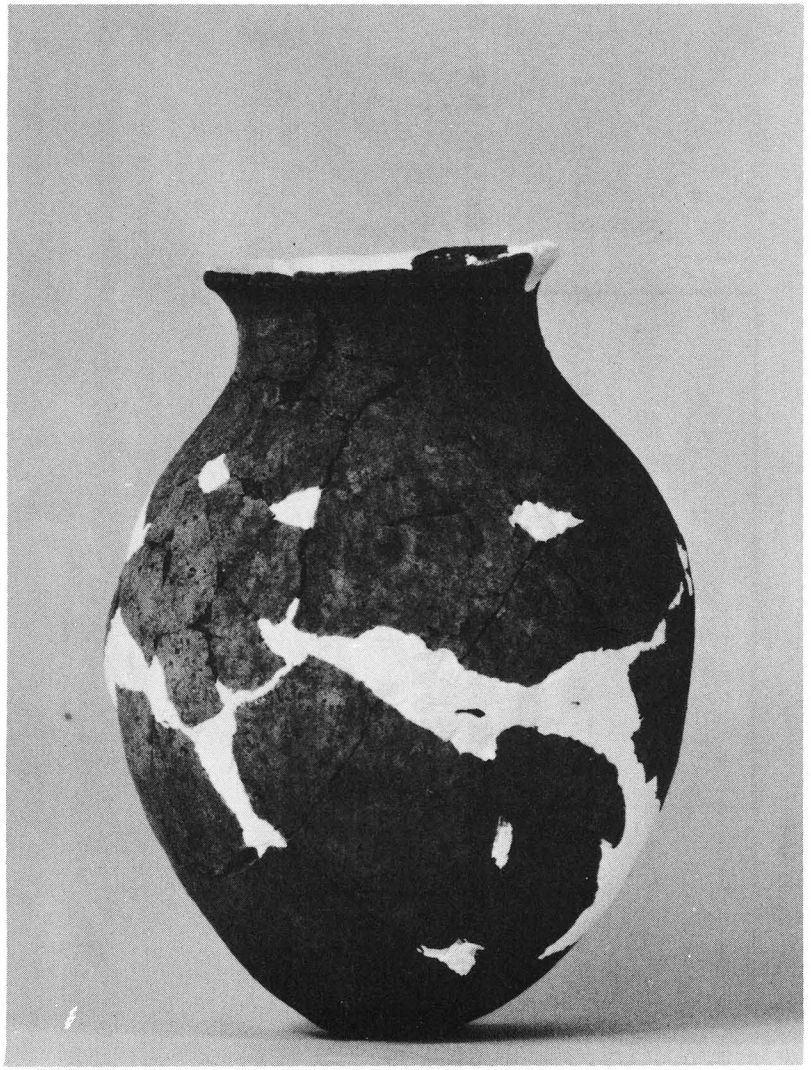


遺物出土状態　　土器2

図版10

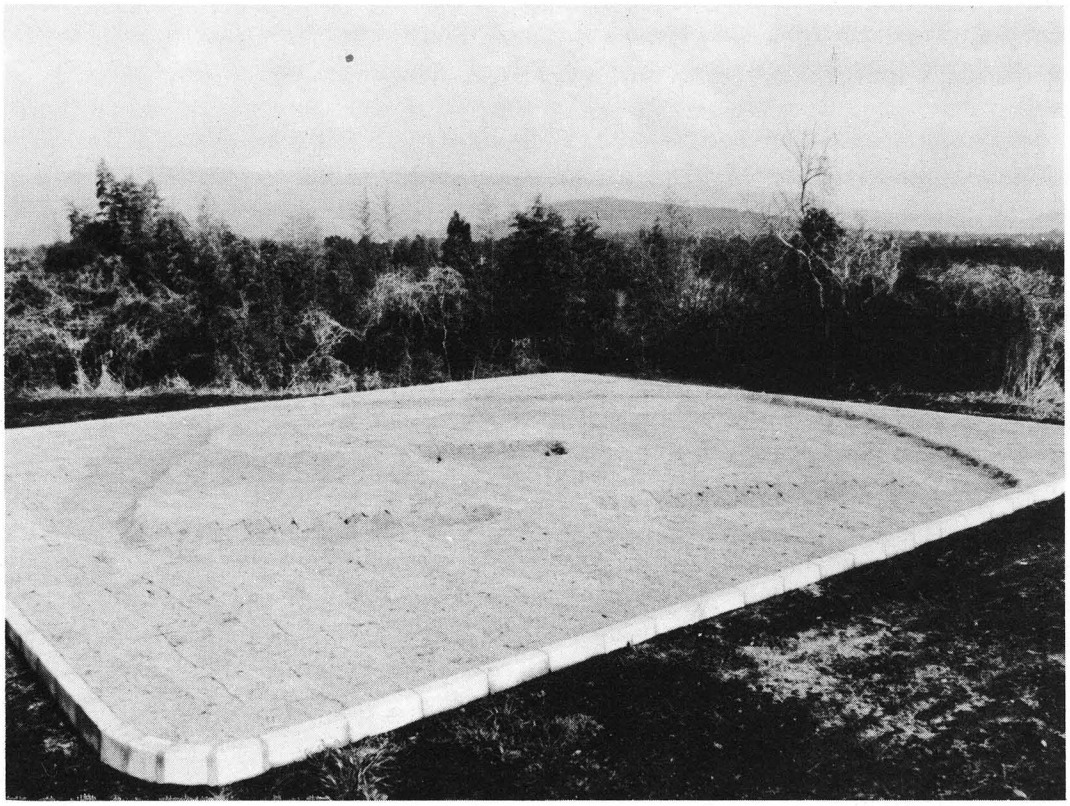


土器 1



出土遺物　　土器 2

図版11



復元した東平下2号方形周溝墓

（付　説）

土地取得と復元工事については，発掘調査を快よく承諾いただいた森木清美氏の協力により町有地との交換で着工することができた。

復元は，遺構が崩壊しないよう盛り土（約30cm）し，それを原形に模して造形した。見学もできるように芝張をして説明板等を設置する。今後は資料として活用し，保護啓蒙を図っていきたい。

川南町文化財調査報告1
東平下周溝墓群
—2号方形周溝墓—
1982年3月31日印刷
1982年3月31日発行
発行　川南町教育委員会
宮崎県児湯郡川南町大字川南
13,676番地の1
印刷　(有)尾形印刷